武道学研究 54-(1)：15-27, 2021〈原著〉 DOI: 10.11214/budo.2105

近代初頭の武士道思想に関する一考察
：「武士道の淵源」と「武士道と倫理・道徳」に着目して

堀川 峻[1)]
酒井利信[2)] 大石純子[2)]

A study on "bushido thought" at the beginning of the modern era: A focus on "the source of bushido" and "bushido's ethics and morality"

Takashi HORIKAWA[1)],
Toshinobu SAKAI[2)], Junko OHISHI[2)]

Abstract

The purpose of this study is to clarify changes in ideas about bushido, especially focusing on the theories of the three historians Shigeno Yasutsugu, Matsumoto Aijū, and Naitō Chisō, which were formulated before the "bushido boom" of around 1905 and until the rise of modern bushido. In this paper, the theories of these three writers will be considered from two main perspectives: "the source of bushido" and "bushido's ethics and morality". On the "source of bushido", Shigeno believed bushido to be something that existed from the beginning of the foundation of the country and saw its roots in the Mononobe and Ōtomo families that served the imperial household. Like Shigeno, Matsumoto thought the source of bushido was found in ancient times and the Yamato Court. In previous research, it was asserted that Shigeno was the first return to the source of bushido and emphasise the connection between it and the emperor. Nevertheless, such a view can also be seen in Matsumoto's work from the previous year. Naito, who wrote his bushido theory two years earlier than Matsumoto, saw the source of bushido as emanating from the generals Nitta and Kusunoki, who protected the imperial household during the Nanboku-chō period. Before the works of Shigeno and Matsumoto, there was also a theory on the origins of bushido based on an historical view inherited from the early modern period, which can be seen in the position of the "Nanchō seitō-ron" (controversy surrounding the Northern and Southern Courts) of the Mitogaku school of Japanese historical and Shintō studies to which they belonged. As for "bushido's ethics and morality", the words "ethics" (*rinri*) and "morality" (*dōtoku*) were not used in Shigeno and Matsumoto's theories of bushido. They were critical of the trend at the time to bring historical research and modern ethics and moral education closer together. Thus, their theories of bushido focused on piecing together historical evidence. Naitō, however, used the word "ethics" (*rinri*) in his discourse. The third decade of the Meiji Period was a time when Japanese literary history was becoming increasingly associated with ethics and moral education. The fact that Naitō was

1) 筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群体育科学学位プログラム
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1
E-mail：thorikawa314@gmail.com

2) 筑波大学体育系

1) Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Degree programs in Comprehensive Human Sciences, Doctoral Program in Physical Education, Health and Sport Sciences, University of Tsukuba
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574, Japan

2) Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

one of the key figures in this movement was thought to be the reason why he spoke of bushido as a source of ethics and morality. In addition, it could be said that such historical trends at that time may have influenced the ideological theory of bushido combined ethics and morality later purported by the scholar Inoue Tetsujirō during the "bushido boom".

Key words : Modern, Bushido, Source, Ethics, Morality

キーワード：近代，武士道，淵源，倫理，道徳

Ⅰ　研究の背景及び目的

これまで武士道思想に関する研究は対象となる時代を問わず多く行われてきており，近代期に説かれた武士道論を対象とする研究も，鈴木康史「明治期日本における武士道の創出[1)]」や船津明生「明治期の武士道についての一考察－新渡戸稲造『武士道』を中心に－[2)]」，Oleg Benesch『Inventing the Way of the Samurai[3)]』等，多くの優れた知見が提出されている．それらは武士道の語が多く用いられ始める，明治30年前後からの武士道論を中心に考察を行っており，特に鈴木やOlegはその時期に語られた武士道が「創出」・「Inventing（発明）」された伝統であるとして，近世以前の武士社会で育まれた思想とは切り離して論を展開している．尤も，武士道の語が一般的に用いられるようになったのは近代以降であり，明治期の代表的な武士道書である新渡戸稲造『BUSHIDO －The Soul of Japan（以下『BUSHIDO』と略す）』についても，その「歴史意識の欠如[4)]」はこれまで多くの研究者によって指摘されてきた．しかし一方で，鈴木は他の論稿において「まったく何もないところから『伝統』が創出されるわけはない[5)]」，「『創出』面に重点を置くあまり，連続性について注意を払わなかった[6)]」とも言及しており，近世以前から「継承され，連続する[7)]」思想的なつながりについても注目していく必要性があることに触れている．このように，これまでの先行研究では，近代武士道が明治30年前後から「創出」・「発明」されていく側面に焦点があてられるあまり，明治維新及び武士社会の崩壊を経験した武士の思想が，近代武士道の隆盛に至るまでの間，いかに継承されてきたかという部分が重要視されてこなかったといえる．本研究は，この大きな課題を解き明かすため，まず近代武士道が隆盛していく明治30年前後よりも以前に説かれた武士道論に着目していくことで，近世以前からの思想的な連続性・つながりと，明治維新から近代武士道隆盛までの思想的変遷を明らかにすることを目的とする．この点について紐解くことは，近代の武士道思想に関する論を深めるのみならず，現代でも「武士道の伝統に由来する[8)]」とされる武道の伝統性を問い直す一助にもなるといえる．

Ⅱ　問題の所在

先にも取り上げた鈴木の研究では，近代武士道論の「第一のピーク[9)]」が「日清戦争から日露戦争後に至る時期（明治30年前後に始まり，30年代後半から40年代初頭あたりまで）[10)]」に起こったと述べられている．この点については，ベネットも「武士道人気の絶頂期はいくつかあり，特に日清戦争から日露戦争にかけて著しく高まったといえる[11)]」と同様の見解を示している．さらに武士道思想研究の大家である笠谷和比古も「時代が明治になって以降も，新たな武士道ブームが沸き起ります．とくに日清・日露戦争の頃から『武士道』という言葉が盛んに引用されるようになり，その間アメリカで出版された新渡戸稲造の『BUSHIDO: The Soul of Japan』が，明治四一（一九〇八）年に日本でも刊行されたことで，『武士道』という言葉があらためて注目をあつめるようになります[12)]」と述べており，日清・日露戦争や新渡戸稲造『BUSHIDO』の発刊を契機として，武士道が注目を集めていくことを「武士道ブーム」という言葉で表している．本研究では，この「武士道ブーム」によって武士道の語に再度注目が集まる以前，つまり日清戦争が始まる明治27年（1894）より前に著された武士道論に着目していく．明治維新以降，明治26年（1893）以前[注1)]に武士道と題された著述・文献はごくわずか[注2)]であるが，この時期において重野安繹・松本愛重・内藤耻叟という3名の史学者が「武士道」と題した論稿を著している．重野は「明治初年の代表的考証史学者[13)]」として帝国大学文科大学の国史科設立時の教授を務めており，さらに「政府の歴史編纂機関[14)]」である太政官修史館に属しつつ歴史論を展開した．松本は「『国学』を志向する高等教育機関[15)]」として明治15年（1882）に設置された東京大学文学部附属古典講習科を卒業し，その後文部省に入省して教科書作成に励みつつ，日本唯一の官選百科事典『古事類苑』の編纂にも従事している[16)]．内藤は水戸学派出身で，明治以降は古典講習科の教員や史学協会の幹事として，当時多くの文献・雑誌に寄稿を行った[17)]．

このように歴史に関する数々の著作・文献を残した彼らが，武士道をいかに解釈し論じたのかについて紐解く事が，本研究の問題の所在である．また同時代に活躍した史学者3名の著述をあわせてみていくことで，それらの共通点・相違点から，当時の傾向や各々の特徴をより細かく捉えることができると考えられる．

さらに本研究の目的である，近世以前からの連続性と武士道ブームまでの思想的変遷について解き明かしていく上で，「武士道の淵源」と「武士道と倫理・道徳」という2つの観点を設定していく．

まず近世以前からの連続性については「武士道の淵源」，つまり本論で取り扱う史学者3名がいかなる時期・思想に武士道の端緒をみたのかに着目していく．この点について紐解くことは，彼ら自身がいかに近世以前からの連続性を語ったか，という部分を解き明かすことになるといえる．このことについては先学で異論を唱えるものもあるが[注3)]，近世以前において育まれた思想がいかに彼らの武士道論に影響を及ぼしていたかという側面に着目して考察を行っていく．

次に武士道ブームまでの思想的変遷については，「武士道と倫理・道徳[注4)]」，つまり武士道を当時にも通用する社会的な規範として語っていたかに着目していく．後にも述べるが，「武士道ブーム」以降の代表的な武士道論者である井上哲次郎や新渡戸稲造などは倫理や道徳の語を用いて武士道の内容を語っており，特に井上は「武士道は何處迄も道德である[18)]」「今後の日本の道德を何う云ふ工合にするかと言へば，どうしても武士道の精神が土臺とならなければならぬ[19)]」として，武士道が近代における道德の土台となることを強調している．「武士道ブーム」以降の文献には他にもこのような論調が多くみられる．そこで本研究では，近代にも通ずる倫理・道德として武士道が語られる論調は「武士道ブーム」以前からみられるものなのか，またそれはいかなる思想的背景をもってなされたのかに着目して考察を行っていく．このことは今後大きく近代期全体の武士道を論じる上での予備的検討として位置付けられるものである．

Ⅲ　先行研究

近代の武士道思想に関する研究は，これまで数えきれない程多く為されてきている．その中で明治期の武士道論について考察されたものとしては，ここまで触れてきた笠谷和比古[20)]や鈴木康史[21)22)]，船津明生[23)]，Oleg Benesch[24)]，アレキサンダー・ベネット[25)]などが主なものとして挙げられる．そこでは「武士道ブーム」以降に著された文献を中心に考察が行われており，新渡戸稲造『BUSHIDO』や，内村鑑三らのキリスト教信者によって説かれた武士道，国家主義やナショナリズムからの影響を受けつつ説かれた武士道，福沢諭吉ら啓蒙家・思想家によって説かれた武士道等，各方面で説かれた武士道論について検討が行われているが，本研究が注目する「武士道ブーム」以前の武士道論に言及されているものはわずかである．

その中でも，この点について管見の限り最も多

く考察が為されているのが，前述したOlegの研究である．そこでは1894年～1905年のいわゆる「武士道ブーム」の時代を「The Early Bushidō Boom[26]」としつつ，それ以前の明治期における思想的変遷を「First Explanations of Bushidō in the Meiji Era[27]」として全34頁に亘って考察を行っている．そこでは，特に尾崎行雄や福沢諭吉，植村正久，鈴木力らの著述について考察を行っており，本研究で取り扱う史学者，重野と松本によって説かれた武士道論にも数行触れられている．Olegはまず重野の武士道論について「Shigeno's historiographical use of bushidō demonstrated that the concept was beginning to acquire legitimacy even among scholars of history, …[28]（重野が行った武士道の歴史学的使用は，歴史学者の間でも武士道の概念が正当性を獲得し始めていることを示した）」と言及し，続いて松本に関しても「…, as could be seen in an 1891 article on bushidō by historian and later Gakushūin University professor Matsumoto Aijū (18??-1935), who attempted to treat bushidō historically while relating it to the present[29]（歴史学者で後の学習院大学の教授である松本愛重によって1891年に発表された武士道に関する論文に見られるように，彼は武士道を歴史的に扱いながら，近代に結びつけようとしていた）」と明治24年（1891）に著された論稿に少々触れつつ，その後は「Matsumoto defined bushidō as the manifestation of Japan's martial essence, tracing its history to Amaterasu and the Age of the Gods. Matsumoto referred to bushidō as a historical relic that could not be applied directly to modern society, but speculated that it might be able to contribute a few unspecified elements to compensate for the lack of ethics in some corners of society beyond the reach of the modern legal system[30]（松本は武士道を日本の武の本質の現れであると定義し，その歴史を天照大神や神々の時代に遡っている．松本は，武士道を近代社会に直接適用できない歴史的遺物としたが，近代の法制度の範囲を超えた社会の一部での倫理観の欠如を補うために，いくつかの不特定多数の要素に貢献できるのではないかと推測している）」と，明治30年（1897）の「東洋哲学」に寄稿された著述を用いて指摘を行っている[注5]．

また鈴木康史は，明治25年（1892）に重野が行った講演「武士道は物部大伴二氏に興り法律政治は藤原氏に成る[31]」を，武士道についておそらく最も早く「実証的な考証[32]」を行ったものであると指摘し，さらに松本に関しては『現代大家武士道叢論[33]』に収録された「武士道」の「武士道の如きは固より封建時代の遺物にして時勢を異にする今日の社會には，直に適用することを得ぺ（ママ）からざるは論なし[34]」という一文に触れるに留まっている．

このように本研究で取り扱う史学者の中でも重野・松本の武士道論については，Olegや鈴木の研究で既に触れられてはいるものの，当時の史学の動向や彼らの経歴・思想を踏まえて，深くまで考察が為されたとは言い難い．また内藤の武士道論に関しては，これまでの近代武士道に関する先行研究において取り上げたものもみられない．本研究はこれら先行研究の指摘を踏まえつつ，これまで詳細に考察されることのなかった史学者3名の武士道論について考察を行っていく．

Ⅳ　研究方法

本研究は，重野安繹・松本愛重・内藤耻叟の3名の史学者によって著された，「武士道ブーム」以前にみられる武士道論について考察を行う，いわゆる文献学的手法を用いる．具体的に用いる文献資料としては，以下のものが挙げられる．

・重野安繹
「東京学士会院雑誌」15（2）　明治26年（1893）
　武士道は物部大伴二氏に興り法律政治は藤原氏に成る[注6]
「史学普及雑誌」8・10・11　明治26年（1893）
　武士道は物部大伴二氏に起り法律政治は藤原氏に成る

・松本愛重
「天則」4(5)　武士道の話　明治24年（1891）
「史論」4　武士道　明治26年（1893）
　5　武士道（承前）　明治26年（1893）
「皇典講究所講演」
　9(88)　武士道　明治25年（1892）
　9(90)　武士道（八十八の續）
　　明治25年（1892）
　10(97)　武士道（九十の續）
　　明治26年（1893）
　(103)　武士道（九十七の續）
　　明治26年（1893）
「石見郷友会雑誌」14　武士道之話
　　明治25年（1892）

・内藤耻叟
「日本文学」9　寄書武士道　明治22年(1889)[注7]

また，重野・松本・内藤がそれぞれ各雑誌，各文献で著したその他の著述についても，関連するものについては適宜触れていくこととする．

Ⅴ　武士道の淵源

明治期における代表的な武士道論者である井上哲次郎は「最早日本の神話の中に於ても武士道の淵源と見做すべき者がないでもない[37]」と神話に武士道の淵源が求められる可能性を示しつつ，大和政権時代の「大伴氏佐伯氏[38]」が「大に武士道の精神を養成して居つた[39]」としている．鈴木康史は，「武士道の源[40]」を遡るこのような「考証（＝過去の参照と歴史の創造）[41]」を，「武士道ブーム」以前において「おそらく最も初期[42]」に行ったのが，本論でも取り扱う重野安繹の講演「武士道は物部大伴二氏に興り法律政治は藤原氏に成る」であるとしている．

本論では先行研究の指摘を踏まえつつ，まずは武士道の淵源を遡る論調を最も早く展開したとされる重野安繹の講演内容について考察を行い，次にその重野の講演よりも前に著された松本愛重と内藤耻叟の武士道論において，武士道の淵源がいかなる時代・思想に見出されているかについてみていきたい．

初めに，重野安繹は史学の中でも元々中国の清朝において発達した考証学が近世日本に受容され，幕末の考証学へと受け継がれていった流れを汲む学派で，明治8年（1875）に設立し「明治の日本史研究の発足[45]」の契機ともなる太政官歴史課修史局[注8]の編集官となった重野安繹，川田剛，久米邦武，星野恒などはこの清朝考証学の流れを汲む「漢学者」であった[46]．このような学者の中でも重野は，自身が主宰した官選国史である『大日本編年史』の編集において，多くの史資料から史実を究明したことでも知られ，特にそれまで最も権威のある歴史書であった『大日本史』における南北朝史が「ほぼ太平記一書に[47]」基づく形で「南朝正統論」を主張していることを批判したことにより，「抹殺博士[48]」などと揶揄されることもあった．以上を踏まえて，重野の武士道論をみていきたい．重野は，明治25年（1892）に行われた講演「武士道は物部大伴二氏に興り法律政治は藤原氏に成る」において，武士道の淵源について以下のように述べている．

> 此武士道と云ふは日本の國體とも云ふ程のものであれば，必ずしも物部大伴の二氏に限ることではありませぬ，是れは，上は天子様より在朝の大臣方國郡の首領たるもの總て武士道を以て主と致されたことは歴々歴史に見えて居ります，唯武士道と云ふ名が付けてないだけで，其實に於ては武士道に當ることが，國初よりして既に其通りであります，但し物部大伴の二氏に於ては，武事の職掌をば代々に傳へた家でありますから，夫れ故に先づ重に此二氏が武士の道をば我職掌として家々に傳へたものである，斯う云ふ所から此二氏に興ると申すのであります，[49]

ここでは「武士の道」を特に伝えた人物として物部氏や大伴氏の名が挙げられており，さらに建国当初から既に「其實」は存在していたとも述べられている．この文章に続いて重野は「各々其族

類を率ひて朝廷に武事を以て忠勤を抽んでたものであります[50]」と，物部・大伴氏が天皇に武力をもって奉職したことを示し，武士道の元となる思想が天皇に向けられたものであったことも強調している．また他でも「武士道をば鎌倉以後に主張して盛に研究したと云ふものは，決して其時に新しく興つたでは無い，其文弱に流れて居る所をば藤原家の文弱に流れて居る所の流弊をば是れで矯めて古の姿に復つたと申すので，茲が此演題の第一主義であります[51]」として鎌倉時代以降に主張された武士道は新しく起こったものではなく，古くからの思想を顧みたものであった事を主張し，またその点がこの講演において最も重要な部分であるとも述べている．このような著述をみると，先行研究における指摘の通り，重野は武士道を武士社会で育まれたものではなく，建国当初から既に存在していた思想として捉え，その淵源を特に天皇に仕えた物部氏や大伴氏に求めることで，武士道と天皇とのつながりを強調していたと考えられる．

次に，この講演の1年前にあたる明治24年（1891）に「武士道の話」を雑誌「天則」に寄稿し，その後も多くの雑誌で武士道に関する論稿を著した松本愛重の武士道論をみていく．松本は明治15年（1882）に設立された東京大学文学部古典講習科を同19年（1886）に卒業後，文部省に入省し国語科教科書作成等の職務に従事する傍ら，女子学習院教授・國學院大学教授としても出講した[52]．松本の最も大きな功績としては，日本唯一の官選百科事典『古事類苑』の編纂があげられ，その他にも学習参考書の編纂等に多く関わっている．「雑誌論文を発表したり公開講演に弁舌をふるう派手なたちではなかった[53]」が，松本は当時の史学において重要な人物の1人であったといえる．その松本が，雑誌「天則」において著した「武士道の話」では，まず「武士道の起源」が述べられる．

武士といふ名稱は中世より起れる所なりと雖も武士道はもと我國尚武の氣風より出で來りたるものにして尚武の風は實に日本固有の性情なるか故に今は遡りて太古の事情より説き出さゞるべからず

吾國太古に武を尚びしとは人の知るか如く諾冉二尊の矛を以て國を造り玉ひたる，天照大神の寶劔を以て三神器の一に加へて天孫に授け玉ひたるか如きなほ降りて崇神帝は刀劔を天下の神社に献納し玉ひ，成務帝は兵器を授けて地方官の信表とし玉ひしが如き凡て皆尚武の風より起りたるを證すべく－中略－特に大伴佐伯の二氏は世々武事を専務とせし家にて禁門を警衛し凡て皇室の守護を以て其職とし累代其事に練達して家名を墜さゞらんことを務めたり[54]

松本は，武士道の語を中世以降にみられる言葉であるとしつつも，それは「我國尚武の氣風」から出てきたものであり，それを解き明かすには太古から論を起こす必要があると述べている．そこでは「諾冉」や「天照大神」，「崇神帝」，「成務帝」が刀剣や矛などを用いたことが挙げられ，日本固有の「尚武の氣風」がこの頃から育まれていたとしている．さらには重野と同じく，大和政権時代の「大伴佐伯の二氏」が特に「皇室の守護」を以て武士道の元となる気風を高めたとも述べられている．松本が論じた「武士道の起源」を見ると，太古まで遡って武士道の起源を論じる部分や，特に大和政権の時代に天皇に仕えた豪族が武士道の元となる思想を広めたとする点など，翌年に行われる重野の講演と共通する部分が非常に多い．先述の通り先行研究では，武士道の淵源をおそらく最も初期に「天皇中心の国家であった時代，物部，大伴にまで遡らせ」たのが重野の講演であったとされているが，これらの点からみれば重野の講演以前にも松本によってほぼ同様の論調が展開されていたことが確認できる．

次にこの松本の「武士道の話」よりも2年前にあたる明治22年（1889）に「寄書武士道」を著した内藤耻叟の武士道論をみてきたい．

内藤耻叟は，『大日本史』を編纂した水戸学派の出身で，明治以降には「国文学系[55]」の史学者として，多くの文献や論考を著した．この国文学系の学者らは明治15年（1882）に史学協会を設立し，その後「国粋主義のナショナリズムの風潮[56]」によって，重野安繹らに代表される「旧修史館系[57]」の漢学者と対立する形で台頭するようになった．同じく明治15年（1882）設立の東京大学文学部附属古典講習科や皇典講究所・またその皇典講究所を母体として明治23年（1890）に設立された國學院の教授陣にはこの国文学系の学者が多く名を連ねており，明治10年代後半以降の史学を牽引した学派であったといえる．本論で考察している3者の中で，松本は『古事類苑』や教科書の編纂等に従事し，この学派同士の対立への関与は少なかったようだが，内藤と重野は「国文学系」と「旧修史館系」のそれぞれに大別され，異なる立場にあったといえる[58]．

以上を踏まえ，次に内藤の武士道の淵源に関する見解についてみていきたい．雑誌「日本文学」に寄稿された「寄書武士道」は以下の記述から始まる．

足利氏の世の末より，武士の道，又は士の道と云ふこと行れ，軍役に從ふ士卒にハ，一種の志操行誼の守るべき者ありて，自から農工商の三民に異なるは，何れの時より興れりと云ふ事は，未，たしかに考へ得ざれども，其かくの如き志操行誼を養成したるハ，そもゝゝ故あることなるべし．元弘建武の亂にあたりて，新田氏の如き，楠氏の如き，其他，忠義勤王の将士ハ，皆よく名分大義のある所を辨じて，方に強盛なる武家の指揮に從はば，既に衰微せる王室を佐け奉りて，鎌倉の勢威に抗敵したるものなれば，是其忠義義烈はいさゝかも間然する所なし[59]．

内藤は「武士の道，又は士の道」という語が足利氏の時代からみられたとしつつも，それには「そもゝゝ故あることなるべし」として，元となる思想がそれ以前から存在したと述べている．そしてその「故」として第一に挙げられているのが，南北朝時代に「衰微せる王室」を助けた「新田氏」や「楠氏」らの「忠義勤王」の武士たちである．ここでは武士道の淵源を太古の時代に求めることはなく，武士社会成立後からその論が始められているものの，武士道として語られるのは南北朝時代に天皇に仕えた武士達の「忠義勤王」の思想であった．内藤はさらに「足利高氏が王家に叛逆せしに及んで，之が鷹犬となりたる輩に至りては，其人固より王家の爲に，忠義を致すは，臣士の本分たることを知らず[60]」と南北朝の動乱期において北朝側であった武士達を批判しつつ，「此時にあたりて，唯芳野乃奥にまします正統の天子を崇め奉りて，臣子の分を失わざる，數十の義士の間にのみ，倫理綱常ハ行はれたりしなり[61]」と，吉野に逃れた「正統の天子[62]」後醍醐天皇に仕える南朝側でのみ武士道が行われていたとも述べている．ここにみられるいわゆる「南朝正統論」は「『大日本史』の三大特筆[63]」とも指摘される，水戸学に特徴的な論調である．つまり内藤の武士道論は，天皇との結びつきを強調した点で重野や松本の武士道論と共通していたが，その「故」として挙げられた思想は重野が批判した水戸学派の「南朝正統論」に基づくものであると考えられた．

ここで特筆すべきは，重野や松本が太古の時代や神話の中に武士道の淵源をみた論稿以前に，近世に著された『大日本史』の「歴史観」を受け継ぐ形でその淵源を語った武士道論が存在していたということである．

Ⅵ　武士道と倫理・道徳

次に，倫理・道徳との関係から3者の武士道論に迫っていきたい．

「武士道ブーム」以降の文献をみていくと，先述した通り井上哲次郎は「武士道は何處迄も道德である」など，倫理や道徳の語を多く用いて武士道論を説いている．さらに海外で人気を博した新渡戸稲造『BUSHIDO』も「ethics[64]」や「moral[65]」の語を用いており，その後新渡戸稲造から直接校閲を得た[66]桜井鷗村の訳本では，それらを「倫理[67]」と「道徳[68]」と訳して刊行されている．このように「武士道ブーム」以降の武士道書においては，倫理・道徳を表すものとして武士道が語られることが非常に多くなっていった．ここでは

そのような「武士道ブーム」後の思想を踏まえつつ，それ以前に著された3者の武士道論をみていきたい．

まず，重野安繹は先述した講演において，物部氏や大伴氏に特徴的な「武勇[69]」・「質朴[70]」・「正直仁勇[71]」，また万葉集の歌にみえる「義理[72]」や「人情[73]」などを武士道の内容として説明しているが，それらを倫理や道徳という言葉で表すことはしていない．重野は明治22年（1889），史学会会長就任の際に行った「史學ニ從事スル者ハ其心至公至平ナラザルベカラズ[74]」という講演で，事実を「公平[75]」に実証することの重要性を語り，さらに「歴史ハ名教ヲ主トスト云フ説アリテ，筆ヲ執ル者，動モスレハ其方ニ引付ケテ，事實ヲ枉クル事アリ[76]」として，歴史研究を「名教[注9]」と結びつけて考えることは「事実ヲ枉クル（曲げる）」結果をもたらす可能性があるとも述べている．これらを鑑みると，重野は歴史研究を倫理・道徳と結びつけることに批判的であり，このような思想が基となって武士道論もあくまで歴史の実証に重点が置かれていたと考えられる．

「武士道の話」を著した松本愛重も，重野同様に倫理や道徳の語を用いて武士道の内容を語ることはなかった．松本は明治27年（1894）の「國學院雑誌」に寄稿された「歴史家及び教育家諸氏に望む[77]」において，歴史教科書の誤りを例に挙げつつ史実を明らかすることの重要性を語り，さらに「歴史専門家が，研究中なる新奇の考説を，普通歴史中に混交して教授せざらんことを望むなり[78]」として，いまだ研究中の事実が明らかでない説をみだりに教授することを戒めている．これら松本の著述からも，重野と同様に歴史的な事実の探求を重視していることが窺え，武士道論もこのような思想が背景となっていた可能性が考えられる．

一方で，明治22年（1889）に内藤耻叟によって著された「寄書武士道」では「倫理」や「倫理綱常」といった語で武士道の内容が表されている．具体的には以下のような記述である．

加之，高氏，直義，直冬等が如き，師直，師泰，道誓等が如き，父子，兄弟，君臣，朋友，皆互に相争闘して，少しも倫理を顧ミ，恩義を思ふの心なし．将長たる者も，既に自から倫理を破りて，恩義を顧ミることをしらざるが故に，亦從て其士卒の我に忠あるを望むべからず[79]．

戦場に臨んて勇武にして怯劣ならず，事にあたつて剛強にして軟弱ならざるを尚ぶのみにして忠孝節義乃いかん倫理綱常の何者たるに至りてハ，敢て深く反省せざるものに似たり[80]．

内藤はここでも，南北朝時代における北朝側の武家を「少しも倫理を顧ミ，恩義を思ふの心なし」と批判しつつ，そこでは「父子，兄弟，君臣，朋友」など儒教の五倫に含まれる内容にも触れられている．また他では「倫理綱常」という語もみられる．ここで用いられた「綱常」は朱子学の三綱五常の略称として知られるものであり[81]，その語は本来「人間関係の基本[82]」を表すものだったが，実際には「子・臣・妻が父・君・夫に奉仕するもの[83]」「下位者の上位者に対する『絶対的服従』[84]」という奉仕や忠誠を強調する意味で用いられた．ここから内藤が用いた「倫理」や「倫理綱常」の内容は，儒教，特に朱子学からの影響が顕著にみられ，その中では目上の者への忠誠・奉仕が特に重要視されていたといえる．またここでみられた北朝側武家への批判や朱子学的な概念の強調も，背景として出身学派である水戸学の思想を窺わせるものであり，内藤の武士道論は主にそのような思想に基づいて語られたものであったと考えられる．

さらに内藤が倫理の語を用いたもう1つの背景として考えられるのが，先述した国文学系史学と当時の倫理・道徳教育との結びつきである．明治10年代頃から，代表的な国文学系史学者である池辺義象や小中村清矩は，後に教育勅語の起草や文部大臣等を務めた井上毅と深い親交があり，野口によれば「井上毅の『国体』の理念研究に際して，かれに直接多大な教示を与えたのは－中略－池辺（小中村）義象であり，その背景にあって，

井上の国体思想（理念）の確立に決定的な思想的影響を及ぼしたのが国学派の小中村清矩であった[85]」．そのような中で井上毅は，倫理・道徳に関する教育について「倫理名教ノ事ニ至リテハ，断然天下ニ布キ示シ，古典国籍ヲ以テ父トシ，儒教ヲ以テ師トシ－中略－學校普通の教トシ，以テ百世ノ後，論定ルヲ待チ給ハンコトヲ[86]」として，「倫理名教」の教育に「古典国籍」が必要であることを示しており，さらに明治21年（1888）の講演においても「國典を講究せること[87]」が，「徳育の全體を包括する所乃主眼[88]」となるものであると述べている．また明治23年（1890）には，「『近代国学』を体現する殆ど唯一の高等教育機関[89]」であり，井上毅とも関係の深かった國學院に，「『道徳教育運動』の第一人者[90]」の西村茂樹が招かれ，道徳学科の講義を行ったことも知られている[91]．ここから，明治10年代以降の小中村や池辺と井上毅の親交を契機として，明治20年代も国文学系史学は倫理・道徳教育と強い結びつきがあったことが窺える．倫理・道徳教育と国文学系史学のそのような関係が築かれる中で，内藤耻叟も先述した明治21年（1888）の井上毅の講演に「井上氏の演説を讀んで其説を賛成す[92]」と強く賛成の意を表し，「我國典ハ，正名明倫[注10]の教なり[93]」と，史学が倫理・道徳的な教えを説くものであると述べている．これら当時の国文学系史学の動向とその中での内藤の立場，思想を見ていくと，史実に基づく歴史研究に主眼を置いた重野や松本に対して，内藤は倫理・道徳教育の為に歴史研究があると考えており，倫理・道徳として武士道を語ったことにもそのような思想が背景となっている可能性が考えられた．

ここまで3者の武士道論について倫理・道徳との関係から考察を行ってきたが，最後に「武士道ブーム」以降の「武士道と倫理・道徳」についても少々触れておきたい．新渡戸と並ぶ「武士道論の一方の雄[94]」であり，「武士道は何處迄も道徳である」と述べた井上哲次郎は，晩年に『懐旧録[95]』を著し，親交のあった重野安繹について語っている．そこでは史学者としての重野の功績を思い返しつつ，当時の史学における「歴史を道徳的に見る[96]」立場と「史實を忠實に世に傳える[97]」立場，大きく2つの流れの中で重野は後者であったとしている．そして「道徳は時勢によって變化する[98]」もので歴史と結びつくべきでないとする重野の見解には，「道徳には古今を通じ，東西に亙つて變らない普遍的方面がある[99]」と否定的な考えを示しており，ここから井上哲次郎は，史学者としての重野を評価しつつも，重野とは反対に，国文学系史学の潮流であった「歴史を道徳的に見る」立場をとっていたといえる．

そして明治38年（1905）に出版された『武士道叢書[100]』の序文において井上哲次郎は，武士道が「古今を一貫して，寸毫も變化あるべからざる[101]」ものであるとも語っており，時代を超えて通じる「普遍的」な思想として武士道を捉えている．これらを鑑みると「武士道ブーム」の中心的な人物であった井上哲次郎は，「歴史を道徳的に見る」立場を土台としつつ，武士社会崩壊後も変わらない倫理・道徳として近代武士道を説いていたと考えられる．ここから「武士道ブーム」の中で語られた倫理・道徳としての武士道論にも，本論で見てきた史学の潮流が，思想的な背景の1つとして影響を与えていた可能性が示唆された．

Ⅶ　結論

ここまで重野安繹・松本愛重・内藤耻叟，3名の史学者が「武士道ブーム」以前に著した武士道論を，「武士道の淵源」と「武士道と倫理・道徳」の大きく2つの視点から考察してきた．その中で，特筆すべきは以下の点である．

武士道の淵源

- 3者に共通して，武士道の語が出てくる以前からその元となる思想があったことに言及し，そこでは武士道と天皇とのつながりが主張されていた．
- 重野安繹は，先行研究での指摘の通り，武士道を建国当初から既に存在していた思想として捉え，その淵源を天皇に仕えた物部氏や大伴氏に求めていた．
- 松本愛重は，重野と同じく太古の時代や大和政

権時代にまで遡り武士道の淵源を論じていた．これまで重野が「おそらく最も初期に」，「天皇中心の国家であった時代」にまで遡り武士道の淵源を論じたとされてきたが，その前年にあたる松本の論稿にもそのような論調が見て取れた．

・内藤耻叟は武士道の淵源を南北朝時代に皇室を守護した新田氏や楠氏にみていた．そこでは出身学派である水戸学の「南朝正統論」に基づく姿勢がみられ，重野や松本が太古の時代や神話の中に武士道の淵源を求める以前に，近世から連続する「歴史観」に基づく形でその淵源を語った武士道論も存在していた．

武士道と倫理・道徳

・重野・松本は，武士道論の中で「倫理」や「道徳」の語を用いることはなかった．彼らは歴史研究と倫理・道徳教育の接近が史実を歪めることにつながるとして，そのような思潮に批判的な見解を持っており，武士道論もあくまで歴史の実証に主眼が置かれていた．

・内藤は「倫理」や「倫理綱常」の語を用いて武士道を語っていた．明治20年代は，国文学系史学が倫理・道徳教育と強く結びついていた時期であり，内藤がその中心的な人物の1人であったことも倫理・道徳として武士道を語った背景として考えられた．

・3者の武士道論には，当時における史学の潮流の中での各々の立場が背景として現れていた．また歴史研究と倫理・道徳教育が結びついていく史学の潮流は，その後の「武士道ブーム」における井上哲次郎の武士道論にも，思想的な背景の1つとして影響を与えた可能性が考えられた．

重野・松本の武士道論は後に，代表的な近代武士道書である『武士道叢書』の不足を補う目的で出版された[102]『現代大家武士道叢論』にも収録されており，また重野と親交のあった井上哲次郎が武士道の淵源については重野らと共通した見解を示していることからも，彼らの論稿は「武士道ブーム」後の思想に少なからず影響を及ぼしていったと考えられた．さらに歴史研究，特に国文学系の流れと倫理・道徳教育が接近していく明治20年代に，その中心的な人物の一人である内藤耻叟が倫理・道徳として武士道を論じたことは，その後井上哲次郎らによって説かれていく武士道論の先駆けとして注目すべきものであった．またそこに近世から受け継がれた水戸学の思想が根強く影響していたことも，武士道思想の近世から近代へのつながりを考える上で重要な示唆を与えるものであった．

Ⅷ　今後の課題

本論では史学者3名の武士道論について考察を行ってきたが，今後は武士道ブーム以前にみられる他の武士道論についてもさらに見ていく必要がある．またそれら武士道ブームまでの思想的変遷を踏まえた上で，近代以降の武士道思想全体についても検討を行っていきたい．

注

注1）タイトルで用いた「近代初頭」の語は，この時期を指すこととする．

注2）この時期に「武士道」と題された著述・文献は，ここで挙げた3者の武士道論以外に，かつら「不知火（5）　武士道」・尾崎行雄『内地外交第七章武士道』・「反省雑誌8（4）吉田松蔭の武士道」があるが，管見の限りこれ以外には見当たらない．

注3）鈴木康史は，近代の武士道論者達が語ったこの「淵源」には，当時の国家主義的な風潮が多分に影響していることを指摘している（明治期日本における武士道の創出，筑波大学体育科学系紀要，24，50，2001）．本研究では，そのような指摘を念頭に置きつつも，史学者3名自身がどのように「連続性」を語ったのかに焦点化して考察を行う．

注4）辞書的定義（新村出『広辞苑　第七版』岩波書店，2018）をみると，倫理は「人倫のみち．実際道徳の規範となる原理．道徳．（p.3106，以下略）」，道徳は「人のふみ行うべき道．－中略－善悪を判断する基準として，一般に承認されている規範の総体（p.2064，以下略）」とある．ここではそのような社会一般で承認される規範やその元となる原理をあわせて「倫理・道徳」とする．

注5）引用文の翻訳は筆者によるものである．

注6）この論稿は明治25年（1892）に東京学士会院にて行われた講演を元にしたものである．

注7）内藤耻叟が著した「寄書武士道」は一部いわゆる変体仮名が使用されていた為，本文上では適宜現代語に訳しつつ考察を行う．

注8）明治10年（1877）に修史館と改称．

注9）辞書的定義（新村出『広辞苑　第七版』岩波書店，2018）をみると，明教は「人として守るべき道を明らかにする教え（p.2873，以下略）」とある．本論では，この定義を踏まえて倫理や道徳的な教えを表す語としてこれを用いる．

注10）類似する語として，天保9年（1838）に水戸学派の中心的人物である藤田東湖によって著された『弘道館記』には「明倫正名」の語がみられる．この『弘道館記』を東湖自身が解説した『弘道館記述義』は，『藤田東湖全集』においてさらに注解が加えられ再編されており，そこでは「明倫」が「人として守るべき道を明にする」，「正名」が「大義名分を正しくする」という意味で解されている（高須芳次郎編『藤田東湖全集：新釈　第2巻』研文書院，1943-1944）．その為ここでは，内藤耻叟が倫理・道徳的な意味合いを水戸学の言葉を援用しつつ表現したものと解釈して用いる．

文献

1）鈴木康史：明治期日本における武士道の創出，筑波大学体育科学系紀要，24，47-55，2001.

2）船津明生：明治期の武士道についての一考察－新渡戸稲造『武士道』を中心に－，名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻，17-32，2003.

3）Oleg Benesch：Inventing the Way of the Samurai, Oxford University Press, 2014.

4）太田雄三：＜太平洋の橋＞としての新渡戸稲造，みすず書房，34，1986.

5）鈴木康史：明治期日本における武士道論の研究－方法論的議論－，大手前大学人文科学部論集，2，68，2001.

6）同上

7）同上

8）日本武道協議会：武道－歴史と特性－，日本武道協議会，3，2017.

9）鈴木康史：明治期日本における武士道の創出，筑波大学体育科学系紀要，24，47，2001.

10）同上

11）アレキサンダー・ベネット：武士の精神とその歩み－武士道の社会思想史的考察－，思文閣出版，231，2009.

12）笠谷和比古：武士道の精神史，筑摩書房，191，2017.

13）藤田大誠：近代国学の研究，弘文堂，22，2007.

14）松沢裕作：重野安繹と久米邦武「正史」を夢みた歴史家，山川出版社，1，2012.

15）藤田大誠：近代国学の研究，弘文堂，261，2007.

16）秋元信英：明治二十年代，松本愛重の教科書，史学，滝川国文，第28号，40-41，2012. 参照

17）石川浩：内藤耻叟著述目録（稿），日本学研究，4，307-356，2001．参照

18）秋山梧庵：現代大家武士道叢論，博文館，136，1905.

19）前掲書，134

20）笠谷和比古：武士道の精神史，筑摩書房，2017.

21）鈴木康史：明治期日本における武士道の創出，筑波大学体育科学系紀要，24，47-55，2001.

22）鈴木康史：明治期日本における武士道論の研究－方法論的議論－，大手前大学人文科学部論集，2巻，65-76，2001.

23）船津明生：明治期の武士道についての一考察－新渡戸稲造『武士道』を中心に－，名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻，17-32，2003.

24）Oleg Benesch：Inventing the Way of the Samurai, Oxford University Press, 2014.

25）アレキサンダー・ベネット：武士の精神と